

安積の誇り、そして野球定期戦

安積高等学校長 久保田範夫

本年四月一日に着任しました。まずは自己紹介を申し上げます。

田村市大越町出身、安積八十八期生で、一年次の担任は竹花栄明先生、二、三年次は吉田清蔵先生（五十四期）でした。生徒会副会長を務め、八十八・九十周年の二回の学校祭（当時はまだ「紫旗祭」とは言いませんでした）を経験、今回校長として着任した直後に、当時のプログラムを校長室の戸棚の中から発見して大変感激しました。

その後、国語教師として昭和六十一年から十一年間、母校安積の教壇に立ちました。恩師である国語の長嶺力夫先生や吉田彌校長先生と同じ空間で緊張の日々を過ごしました。この間、生徒会や応援団、更に野球部の第三顧問を務めるなどしました。

その後、県教育庁に三度、足かけ十一年間勤務している中で、東日本大震災が発生、警戒区域等の学校再開に努め、現在も県内外で避難生活を余儀なくされている約一万四千人の子供たちがどうしたら福島県に戻って来てくれるか、頭を痛め続けました。

そして、本年四月八日。第百二十九期生入学式で、私は次のように生徒たちに語りかけました。



が起こったのですが、その時、マウンドに立っていたのは私でした。（ほとんどの観客が山なりの投球を予想していたのに、「六十歳に近い校長にしては、まともな球が行ったな」という驚きのどよめきだったのかどうかは知る由もありません・・・）「只今から第七回安積高校・安積黎明高校野球部定期戦の始球式を行います。始球者は、久保田範夫安積高等学校長です。」女子マネージャーによる球場アナウンスは、どこか遠いところから聞こえてくるような感じでした。

始球式と言うと、女性タレントや野球に関係のない人が投げることが多く、ワンバウンドであったり、或いは山なりの投球だったりします。しかし、私はど真ん中の直球を投げ込みたかったのです。

開成山のマウンドは、顧問時代にグラウンド整備の時、何度も登っているのですが、そこで投げることは、ましてや始球式で投げることは、やはり特別なことなのだと今更ながら痛感しました。主審からボールを手渡され、ノーワインドアップで投げ終わった直後に球場のどよめきを感じながらも、どんなフォームだったのか、球道がどの辺を辿ったのか、よく覚えていないのです。自分では何となく「インハイのくそボールになっちゃった」と思ったのですが、ネット裏に戻してみると、「打ちにくいところ」に決まっちゃったよ。」（お世辞に違いないが・・・）

